歴史地理学　47－1（222）64～79　2005.1

# 朝鮮時代の地誌・地理書にあらわれる風水用語とその概念

渋　谷　鎮　明

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．東アジアに広まった二つの「風水」
(1) 形法とその分布
(2) 理法とその分布
(3) 形法・理法から見た風水の「地域性」
Ⅲ．朝鮮半島における形法の論理
(1)「気」と「脈」
(2)「気」を滞留させる山と水
Ⅳ．地誌・地理書などの主要文献にあらわれる風水用語と概念
(1) 脈
(2) 主山（鎮山）・案山など
(3) 水口
Ⅴ．結語―東アジアの歴史地理学と風水

## Ⅰ．はじめに

本稿は，東アジアに広く見られる風水思想について，既往の研究成果を参考にしつつ，特に朝鮮半島を中心に根強く見られる，「形法（形勢学派）」（地形を中心とする自然環境を独特の方法で読みとり，そこから良い場所を見いだそうとする流派）について整理検討する。同時に，朝鮮王朝時代に編纂された官撰地誌や，当時作成された重要な地理書にあらわれる風水用語に着目し，それがいかに表れ，何を示しているかについて検討してゆくこととする。またそれを通じて，風水の「地域性」や，歴史地理学との接点についても考察するものである。

中国を起源として，朝鮮半島・琉球・ベトナムなど東アジアの諸地域に広まり，現在でもさまざまな側面で各地域の生活に密着している風水[1]は，本来気や脈の思想，周易，陰陽五行説などを基盤として，空間や地形を把握し，吉凶判断を行い，その判断をもとに良い場所・方位を選ぶ技術である。そして多くの場合，そこで選択された良い場所に建築物や墓を造営したり，良い方位に向けてそれらの人工物を配置し，良い方位を考慮しながら建築物内部のインテリアを調整することで，財物を得たり，家が繁栄するなどの実利が得られると考えられている。

日本においても「風水」という語は，1990年代以降，占いの一種として知られるようになってはきているが，他の東アジア諸国で用いられる「風水」と比較すると，ほんの一部であると言わざるを得ない。というのは，風水には大きく分けて二つの流派，すなわち気が山や水の中を流れるとの認識から地表面に表れる地形・地勢を判断し，その吉凶を判断する「形法（形勢学派）」と，方位を易の八卦や五行説に変換して方位の吉凶を判断する「理法（原理学派）」が存在することを考慮すると[2]，現在日本において流行している「風水」やそれ以前から存在する家相の考え方は，ほぼ理法の範疇に入るためである。したがって日本では形法の考え方が十分に理解さ

キーワード：風水，形法，風水用語，風水の地域性，地誌・地理書，朝鮮時代

れていないのである。そのため，たとえば現在の韓国において，地形を判断する形法が，墓地選定を通じて祖先祭祀などにも深く関連していることなども，日本では一般には十分に理解されていないかもしれない[3]。

しかし，日本においても研究者レベルでは風水に関するある程度の研究蓄積があるが，学術的な研究として風水を扱ったものは1980年代後半以降に集中している。これは日本だけではなく，韓国・中国・台湾などの東アジアの諸地域でも同様である。まずこれらの研究成果に簡単に触れながら論を進めてゆきたい。

1980年代以前にも風水に関する研究は，数は少ないものの中国思想や人類学などでの業績があり，現在でもしばしば引用されるものは多い。特に牧尾良海の翻訳によるデ・ホロートの著作[4]や，フリードマンに代表される人類学の研究など，中国に関する研究としての蓄積がある[5]。また，これまできわめてよく引用されてきた研究として，戦前期の朝鮮の風水を調査・整理した村山智順の『朝鮮の風水』[6]がある。本書の内容はきわめて詳細なものであり，一時期，風水に関する研究には必ずと言っていいほど引用された「山局之図」をはじめとして，現在でもその影響は大きい。

1980年代後半以降，日本においてはある種の「風水研究」ブームが起こったと言ってよいだろう。建築学分野では80年代後半には，農村計画などの計画分野で「風水」を題材としはじめている[7]。また日本以外の東アジア諸国においても同様の傾向が見て取れる。ただし韓国においては，例外的に1970年代後半にはすでに建築学分野において，建築や集落と風水の関連について言及する論文が多数発表されている[8]。

日本においては，1989年より渡邊欣雄らを中心として行われた文部省科学研究費による共同研究「全国風水研究者会議」が，それまで各分野の研究者が独自に行ってきた研究蓄積を取りまとめる役割を果たしたものと考えられる。ここでは人類学，東洋哲学，東洋史，考古学，建築学，地理学[9]などにおいて風水研究を行ってきた研究者が情報交換を行い，風水という，広範な研究分野を横断する対象への研究の足がかりとなった。

この共同研究の成果の一つに『風水論集』[10]があるが，この文献の章構成を見ると，日本，朝鮮半島，中国，沖縄，それ以外の地域ごとに風水理論，陽基（集落・都市を対象とする風水），陽宅（住宅・建築物に関する風水），陰宅（墓地・王陵に関する風水）の四つのパートに分かれており，風水研究における各地域と占定する対象のバラエティが見て取れる。特に東アジア諸地域において，共通性をもちつつも，風水のありように地域差があることが理解できる点で重要である。

この文献の編者の一人である三浦國雄は，同書において，この時期における今後の風水研究の課題として，①さまざまな風水書の書誌的研究，②風水師の研究，③羅盤（風水師用コンパス）についての研究，④中国の風水と風水研究の現状の把握があると述べている[11]。現在までに④の中国の風水の現状についてはある程度明らかになりつつあるように思われるが，他の項目については十分に行われているとは言いがたい。

渡邊は『風水の社会人類学』において，1992年当時発想した「風水研究の理想モデル」を示しているが[12]，上記の『風水論集』の構成や，三浦の示した課題にはないものとして，風水の理論や歴史などの基礎的研究，各国の風水民俗，山水画や景勝など景観造形法，民俗宗教や造林法などへの風水の応用実態などの分野を構想した。これらのことからも，風水研究の内容として考えられるものが非常に多岐にわたることが理解されるだろう。

渡邊は同書において，当初の風水に関する

研究論文には必ず風水自体の説明が必要であったと述べているが[13]，現在では次第に「風水自体に関する説明抜きの」の段階に至っており，確かに近年の論文は各論に移っているように思われる。

このような風水の各論を追究しており，今後重要となるであろう研究をあげるならば，東洋史の都築による沖縄の風水と造林法の研究[14]は，沖縄という限定された地域での風水のありように迫るものであるし，また東洋哲学の水口による中国の「気」思想と風水書の検討[15]などは，これまで十分でなかった風水の哲学的基礎にかかわる，東洋哲学の研究者による研究である。さらには，日本の陰陽道プロパーの研究者が，日本における「風水」の姿をとらえようとする鈴木の研究[16]なども，現在の日本における「風水」認識を踏まえるならばきわめて重要であろう。

一方これまで，東アジアにおける風水を扱った重要な文献が翻訳されてきた。例えば中国の建築学者何曉昕の『風水探源』は，方位を見る風水「理法」と地形をみる風水「形法」を強く意識しており，風水の二つの方法を明確に示している点で重要である[17]。また韓国の地理学者崔昌祚による『韓国の風水思想』も，韓国における風水のありようを網羅的に示した基本的な文献であり，さまざまな研究に引用されている[18]。これらをはじめとする風水関係の文献が翻訳され，東アジア各地の風水の姿がより明確になってきている。

しかし，風水の基本的な理論内容や用語のうち，重要だが扱われていないものもまだ存在する。たとえば「水口」という風水用語は，基本的に前述の形法の盛んな地域には見られるものであるが，あまり注目されていない。風水に関係する分野の広さを，研究者の関心がまだカバーできていないとも言えるだろう。

地理学分野における風水研究としては，前掲の韓国の地理学者，崔昌祚による一連の研究がまずあげられるであろう。崔昌祚は1980年代から韓国における風水理論と，その都市や墓地などへの影響に関する研究を進め，一般向けを含めた多くの研究を発表し，風水の中でも韓国特有の部分を指す「自生風水」の概念を提示している[19]。それ以外にも韓国では地理学者がさまざまな視点から風水に関わる研究を行ってきている[20]。特に韓国で地理学者による研究が多いのは，後述するような，ある種の立地論とも言える「形法」が発達しているためであるかもしれない。

これら地理学者による研究を含め，ここまで述べた風水に関する研究を概観すると，実は思いのほか，東アジアの歴史地理学的研究にとって重要な地誌・古地図・族譜[21]を資料として扱った研究が多い。これはおそらくは，風水のような一見つかみどころのない対象についてアプローチする際に，中国や朝鮮における官撰地誌のような基本的な文献資料を用いたり，族譜のような東アジアにおいて普遍的な資料を用いようとしたためと考えられる。また古地図なども，風水の考え方が形態として表出するものとして扱われるケースがある。

このような研究の例としては，堀込による，中国の方志を用いた風水の基本的理解に関する研究[22]，そして崔昌祚による，朝鮮時代の地誌書である『新増東国輿地勝覧』を用いた検討[23]などが代表的である。それ以外にも中国の族譜の記載を扱った瀬川[24]の研究や，族譜に掲載される墓の位置を示す風水図を利用した何曉昕[25]，朝鮮時代の地理書である『択里志』から風水用語を抽出した三浦の論考[26]なども，基本的には風水を歴史資料からとらえようとする試みであると理解される。

これまでの風水に関する研究を概観すると，形法と理法の相違が意識されてきており，そのうち自然環境や自然観，立地に関係する[27]形法については，地理学において扱うべき研究対象であると思われる。またその

際に一つの基本的な方法として，地誌・古地図・族譜などにあらわれる風水用語や風水に関係する事項を用いてきたことが理解される。

## Ⅱ．東アジアに広まった二つの「風水」

次に，これまでの風水研究の成果を整理しつつ，新たな知見を付け加え，前章で述べた形法と理法の大まかな特性と，東アジア各地域における両者の現状について確認しておきたい。

### (1) 形法とその分布

東アジアでは風水が地域ごとに異なった特性をもっている。これについても形法・理法という二つの流派の受容の程度によってその特性が形成されたとも考えられる。

地形の判断を主とする形法は，現在日本で考えられている「風水」のイメージとはかなりかけ離れたものであろう。山を一つのつながりとしてとらえ，それが生気あるいは地気のあらわれであると見る感覚，そのスケールの大きさなどは，風水を方位の吉凶判断をするものと考えていては理解しにくいものである。

詳しくは次章で述べることになるが，形法の特徴としては，地形，特に山を「気」の流れる「脈」ととらえ，そこから適切な立地位置を選定することを目的とする点，また気と地形の関係を示す際に用いられる「主山」「案山」などの風水上の地形を示す語を用いる点などがあげられる。したがって，ある地域にこのような目的・用語・概念が存在すれば，形法が用いられている一つの証左になると考えられる[28]。

本稿で取りあげる朝鮮時代の邑志の記述などには，方位に関する記載はなく，また前述のように古典的な風水書や地理書にも方位に関する記載は少ない。朝鮮半島では方位判断は，相対的には弱かったように思われる。

形法は中国にも広く存在すると考えられる。現在のところ，中国の風水においてはまだ明らかになっていない部分が多いものの，たとえば堀込によれば，中国の明・清代の地方志には「形家謂……」などのように，地勢の判断をする形法を行う風水師の言としてさまざまな形法的な事項が述べられていたり，「主山」などといった用語が用いられている。さらには，さまざまな地方志に，傷ついた「龍脈」を保護するため補修したり，山を買い取ったり，植林をするなどの事例が記されており[29]，朝鮮半島で行われている形法にきわめて近いものが存在しているといえる。

また『台湾府史』巻之二叙山には，台湾の山の形勢は，福建省の五虎門から龍脈が現在の台湾海峡を渡り，大洋中の二つの山を経て鶏籠山に至り，そこから始まると記されており[30]，やはり山を一つながりの「脈」と見ていることが推測される。このことから，台湾をも含め，清代にはすでに形法的な考え方が存在していたことが理解されよう。

この「脈」に関する考え方以外にも，前章でもふれた「水口」の概念や「形局論」も中国において広く用いられていたものと思われる。何暁昕は，中国東南部の農村において，上記の水口に当たる場所がきわめて重視され，保護されていることを報告している[31]。また，中国の族譜（家系図）には一族の住む村の周辺環境が「喝形」と呼ばれる，朝鮮半島における「形局論」と同様の方法で認識されていることについても触れられており，形法的な視角が中国においてきわめて広く用いられていたことが理解できる。

### (2) 理法とその分布

陰陽五行説や周易などをもとに方位判断を行う理法は，時期的には形法よりも遅く発生したものと考えられるが，現代の日本をはじめとしてきわめて広く用いられている。特に方位判断の基準に易の八卦（後天八卦方位）

と五行の配当が用いられていることが特徴であり，ある地域でこれらの特徴を持つ「風水」がある場合，理法の影響下にあると考えてよいだろう。

中国の風水について早い時期に研究をしたデ・ホロートによると，方位判断を主体とする理法よりも地形を判断する形法が古く，福建では清末でも伝統的な形法を行う風水師のほうが高く評されていたようである[32]。

このことは逆に，中国においては理法も盛んに用いられて来たことを示している。中国の風水書を見ても，方位判断に関するものも多く，普通に風水の一つの方法として用いられてきたものと思われる。また香港，台湾などでも様々な理法の方位判断が用いられ，現在の日本で用いられるようなインテリア風水に近い，方位判断を行う風水師が活躍している地域でもあり，ある意味では中国本土よりも理法が現在も活発に用いられている地域である。

沖縄では，風水見分などを中心に方位への関心が高く，八宅法などの方位判断も行われており，形法に比して，相対的に理法の影響が強く見られるように思われる。

これに対し，朝鮮半島では『民宅三要』などの文献があり，家屋の配置に関わる方位判断が存在はしていたが，相対的にきわめて形法が強い。例えば墓の立地を風水で決定する際には，立地位置に関する判断が大部分を占め，最後に微調整として方位判断が行われる程度であり，理法はあまり用いられないようである。近年では，日本で書かれた風水書が韓国で翻訳・出版されており，これをみても本来理法は朝鮮半島においては主流ではなかったことが理解される。

日本については，現在「風水」と呼ばれているものは，そのほとんどが理法の範疇に入るものである。特に方位と色を結びつける判断は，前述の五行説を用いたものと思われる。また，最近色と運勢を直接結びつけるものも「風水」と呼ばれることが多く，方位や地形など空間的側面に関わらないものも「風水」として認知されている。

一方，日本には家相による方位判断があるが，これも実は易を基盤とした方位判断であり，風水（理法）の一部としてとらえても差し支えないように思われる。江戸期の家相書には「地理」「風水」といった語が用いられており[33]，両者は本質的に大きな差はないように思われる。現在の日本の状況をきわめて大まかに述べると，易の八卦方位をもとにする家相中心の方位判断があったところに，五行を中心とする方位判断が近年になって導入されたと見ることもできるだろう。

(3) 形法・理法から見た風水の「地域性」

地形を気の流れとして読み，立地のベストポイントを選ぶ形法は，朝鮮半島などにおいては墓の立地選定に深く関わり，重要な施設の立地選定の際にも参考とされた可能性がある。このような形法の姿は中国，台湾などでも見ることができる[34]。これに対し沖縄は，「気」の感覚はあっても，形法に特有の山などのつながりを気の現れや流れとして考え，「脈」としてとらえる見方が欠けており，朝鮮半島のような立地判断はあまり見られず，相対的に形法が弱い地域なのではないかと考えられる。

これに対し陰陽五行説や易を基盤とする方位判断を行う理法は，沖縄などでは家や建築物の敷地内や家屋内の方位判断に用いられている。特に沖縄（琉球），現在の香港，日本などで強く見られる。逆に朝鮮半島においては，形法に比べ，理法は相対的に弱かったようである。

この両者は現在のところかなり混じり合っているものの，大まかにいって朝鮮半島の風水は形法が強く，琉球や日本の「風水」や家相および現在の香港で用いられている風水は理法が強いのではないかと思われる。また中

国・台湾・ベトナム[35]では両者が比較的バランスよく用いられてきたと言えるのではないだろうか。

## Ⅲ．朝鮮半島における形法の論理

前章で述べたように，形法は朝鮮半島や中国で比較的よく用いられてきたと思われるが，その中で，とりわけ形法が強い朝鮮半島の風水を例に，その原理についてこれまでの理解に基づき整理し，用語と概念について確認しておきたい。

### (1)「気」と「脈」

風水の中で，地形・地勢が「気」の動きを反映したものととらえ，山のつながりや形態から，「生気（精気）」が地中からわき出す良い場所である「穴」や「明堂」を探し出し，そこに墓や建物，集落などの人工物を作り，その気を浴びることで家の繁栄を得ようとする流派があり，これを「形法」あるいは「江西学派」，「形勢学派」等と呼ぶ。

朝鮮半島では，風水は方位を占うより，地形を判断し良い場所を見いだす方法としての色彩が強い。このことは，朝鮮半島の風水の原典とされる『青烏経』や『錦嚢経』が気と脈（山のつながり），山の形態ばかりに言及し，方位に関する項目が全くないことからも見て取れる。たとえば『錦嚢経』をみると，気感・因勢・平支・山勢・四勢・貴穴・形勢・取類の八編から構成されており，そのほとんどが「気」を根拠とする，山を中心とした地勢の判断法である。

ただし，もちろん朝鮮半島で行われてきた風水の中に，本稿で「理法」と呼んでいる方位や陰陽五行・易にかかわる吉凶判断方法が全くないわけではない。相対的に形法的なものが強かったということである。

朝鮮における風水とは，このような論理をもとに，人間にとって有益な「生気」の得られるところ（吉地・穴・明堂）に家や墓[36]を造営し，その生気を浴びることで家の繁栄などを企図するという目的を持っている。これをみても，現在日本においてイメージされている「風水」とはかなり異なったものであることが理解できよう。

このような朝鮮半島の風水を，地理学者である崔昌祚は，『錦嚢経』などの風水書をもとに，地形を見て良い場所を発見し，家や墓などを配置するための六つの方法にまとめている。これはほぼ，形法を用いて良い場所を見つける手順を示しているといえる。

図１を用いてその概略を説明すると，まず，気が流れている山のつながり（尾根線）を一つの脈ととらえ，その善し悪しをつながり方や形態から判断し，気が滞留している良い山，「主山」（図中①）を見いだす。このとき，山の連なりを龍がうねる姿に比喩し，「龍脈」と呼ぶのが風水では一般的である。

この背後には図２に示すような山に関する認識があるように思われる。図２は，気・脈と山の関係を示したものである。図２中のＡ

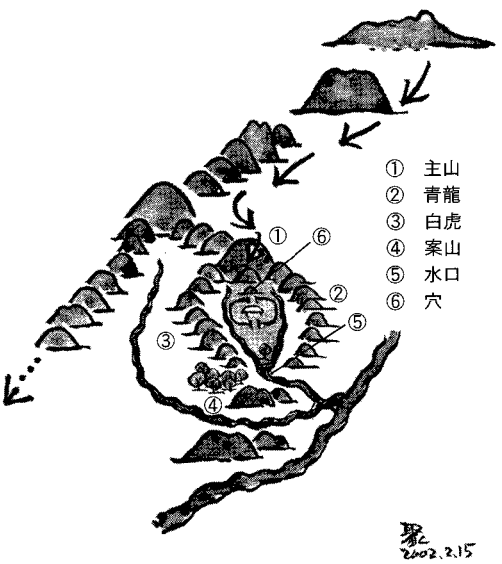


**図１**　主山・穴の周囲を示す風水用語
（齊木崇人・渋谷鎮明「東アジアの風水探源　気と脈の自然観」，BIOCity23，2002，37頁を修正）

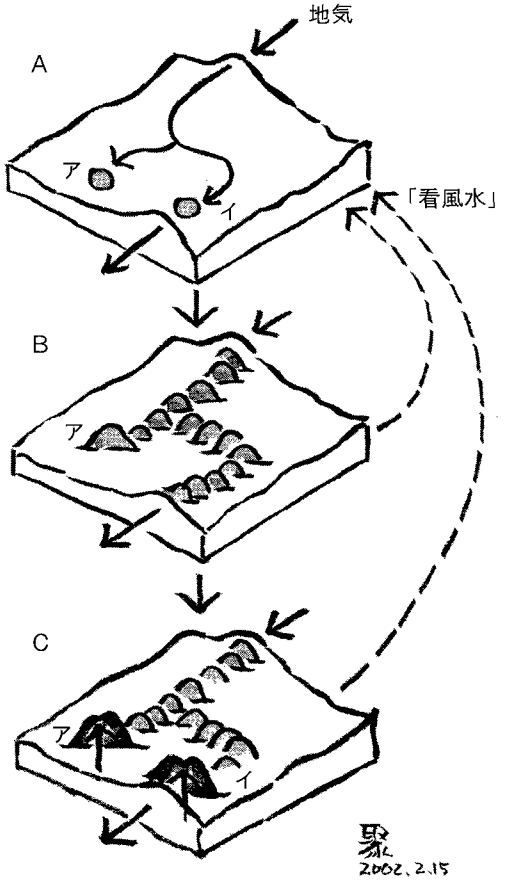


**図2**　気と脈の関係
（齊木・渋谷，2002，37頁を修正）

のように，形法の考え方においては，地中を地気（生気）が流れているものと考えられている。その流れに従って，Bに示すように山が形をなして連なると考えられるのである。また場所によって気の強いところ，弱いところ，あるいは止まっているところがあるとも認識され，その気の強弱や属性によって地表面の山の形が規定される。例えば図2中Cのアに示すように，気の強いところには高い山ができ，イのように気が止まっているところでは，山の連なりも止まると考えるのである。したがって，形法において山を見るということは，BやCのように地表面に表れる山の状態を手がかりに，Aの気の流れや属性を読みとるという意味がある。

こう考えると，山の認識が日本人の持つ感覚と非常に異なっている点が理解されると同時に，「山を気が流れる」といった言い方がいったいどのような感覚を示そうとしているのかが理解されるであろう。

このような考え方の中で，主山は気の勢いが止まりつつも山を生じるだけの気が滞留する場所としてとらえられ，良い場所と考えられる。形法の原典である『錦囊経』の因勢編第二の冒頭にも「……其行也　因地之勢　其聚也　因勢之止　葬者原其起乗其止」とあるように，そのような気の止まる場所が墓地などを作るのに良い場所だとしている。

(2)「気」を滞留させる山と水

次にその主山の周囲の山々（青龍・白虎・案山など，図1中②～④）の配置を判断し，主山の周りの河川の善し悪しを判断する。これは，生気が主山から湧き出し，しかも風に吹かれると散らばってしまい，十分に気を受けることができないということと，気が水（河川）に触れるとそこで止まるということに根拠をおいている。いわば青龍・白虎に当たる山々に囲まれ，前方に河川があり気が逃げないような，「気のダム」を作るような発想と言えるであろう。またここでは，主山から見て左側の山並みを青龍とし，右側の山を白虎というが，一般に考えられるようにこれらの用語は，方位との関連が特にないことに注意すべきである。

またやはり風水にかかわる学術的研究において，これまであまり指摘されていない「水口」についても，上記の「気のダム」を形作る周囲の山々が低くなり，河川が流れ出す地点（図1中⑤）であるために，きわめて重要視されている。特に「水口関鎖」という図3のような，水口のところで左右から山が迫っている地形が，気を逃さないために良いものとされている。このため全体としては，きわ

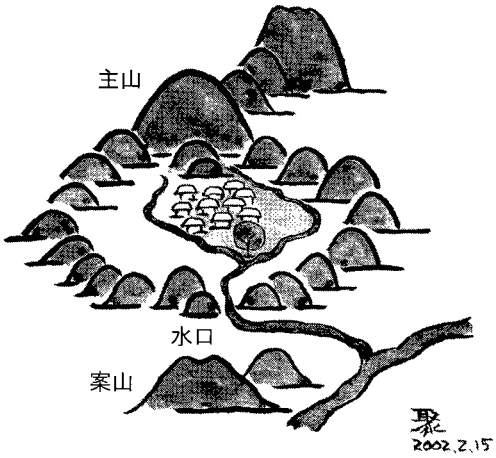


**図3**　「水口」の閉じられた地形
（齊木・渋谷，2002，37頁を修正）

めて閉ざされた小盆地状の地形が評価されているとも考えられる。

そして，主山から気が流れ出すポイントである「穴」（図1中⑥）の位置を確定する（定穴法）。このような論理で良い場所としての「穴」を見いだしてゆくのであるが[37]，総合的にみても，これらの論理によく合致する地形は，一般的に山に囲まれた小さな盆地状の地形である。

このような地形の理想図としてよく知られているものが，1931年に朝鮮総督府の嘱託として『朝鮮の風水』を記した村山の「山局之図」である（図4右）。この図自体は女性の性器になぞらえて朝鮮の風水における理想の図を示したものであるが，図4左に並べて示した風水図（19世紀後半）とよく似ており，理想の形が良く表現されたものと思われる。

また，このような方法とは多少異なる「形局」あるいは「類形」という地形のとらえ方も存在する。これは，地形にその地の持つ気が表現されるという「物形規局論」とよばれる考え方を基礎として，地形，特に山の形態を物や動物，人間の姿などにたとえる。そしてその場所にはそれに対応した「気」が存在すると考えて，そこに住む者の吉凶禍福を判断する。例えば，筆のように尖った形の山があると，官僚や学者になる者が多いとか，船

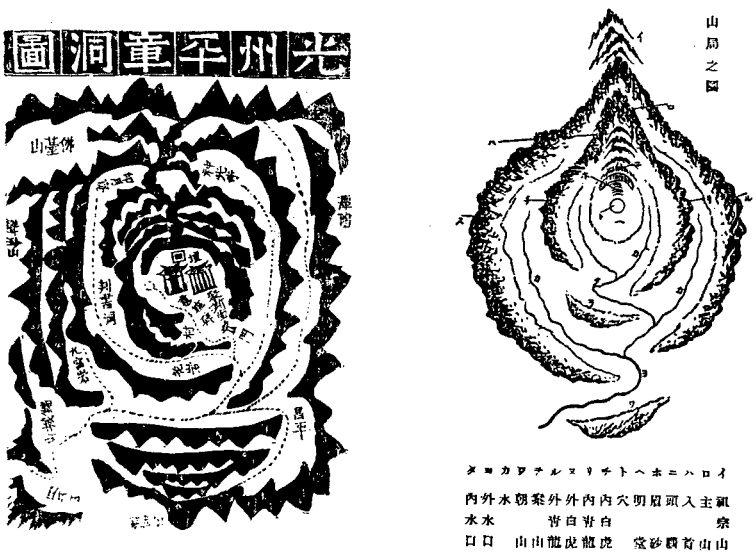


**図4**　風水図と山局之図の対比
（左：光州平章洞図，19世紀後半，李燦編『韓国の古地図』（韓文）313頁より，
右：山局之図，村山智順『朝鮮の風水』17頁より）

の形をした山がある場合には，船が沈むような悪いことが起こらないように井戸を掘らない，などの判断を行うものである。

朝鮮半島においては，ここまで述べたように地形を「気」の流れる「脈」として捉えた上で，良い「気」が得られ，それを維持できるような地形を備えた場所を選択するものが「風水」とされる。そのため，地形（山や河川）を表現する，主山・案山・水口などの風水用語が多用されてきた。

本来このような風水は，ある種の立地選定のために用いられるものであるが，朝鮮時代には自然環境をとらえ解釈するための方法として広く定着しており，後述するようにさまざまな側面で用いられてきた。いわば現代の「地理学」の代わりであったと言えるかもしれない。

## Ⅳ．地誌・地理書などの主要文献にあらわれる風水用語と概念

本章では，ここまで述べた形法を中心とする朝鮮半島に強く見られる風水に用いられる用語や，それに伴う形法特有の概念について具体的な例をあげて検討したい。ここでは特に朝鮮王朝時代に編纂された官撰地誌や，当時作成された重要な地理書に出る用語や概念を例として取り上げる。

当時の朝鮮半島の文献にはさまざまな風水用語が頻出する。とりわけ自然環境に関わる文献や項目に多い。たとえば，1871年編纂の邑志には，318カ所の行政単位（邑）のうち，実に228カ所で風水用語が見られる。また朝鮮時代後期の著名な地理書である『択里志』には，全体で50種を超える風水用語が見られると報告されている[38]。

本章では，これら多くの風水用語のうち，形法に直接関連する「脈」に関わるもの，「主山・案山」に関するもの，そしてこれまであまり注目されてこなかった「水口」を中心に検討してゆきたい。

### (1) 脈

前章でも触れたように，朝鮮半島の風水においては，気と脈の関係に基づいて地形を見る場合が多い。このような脈の感覚について具体的な例をあげてみたい。

1832年に編纂された『慶尚道邑誌』中の「大邱府邑誌」には，「地脈」を通すために石で作られた亀を置いたという記載がある。「大邱府邑誌」山川条の冒頭の連亀山に関する記載を見ると，おおよそ以下のようなことが記されている。

連亀山は大邱府の南三里にあり，「鎮山」（図２における主山とほぼ同義）である。伝承によると，大邱を邑と定めた頃に石で作った亀を稜線上に配置し，その際南に頭を向け北に尾を向けることで地脈を通した。そのためこの山を連亀山としたとのことである。その上で，この連亀山は成佛山から（脈が）来ていると記されている[39]。

また成佛山の項を参照すると，大邱府の役所の案山であり，この山は琵瑟山より連なっており，同様にして，この山も最頂山，八鳥嶺から連なっているということが記されている[40]。

これらの関係を示したのが図５であるが，位置関係を確認すると，大邱府は錦江の南に立地した都市であり，その背後（南側）に連亀山がある。さらにその南に琵瑟山，最頂山，八鳥嶺が連なっている。図５に使用した地図は1861年に金正浩によって作成された「大東輿地図」であるが，この地図には前述の「脈」に相当する山の連なりが太い黒線で表現されている。

図５を参考に上記の記載を検討すると，大邱の都城（X）に気を供給する主山（鎮山）は連亀山（Y）である。そこに都城の方向に地脈をつなげるものとして，亀岩が南向けに設置されたのである。さらにその地脈は，八鳥嶺，最頂山，琵瑟山と連なってきたものであることが表現されている。すなわち石造の

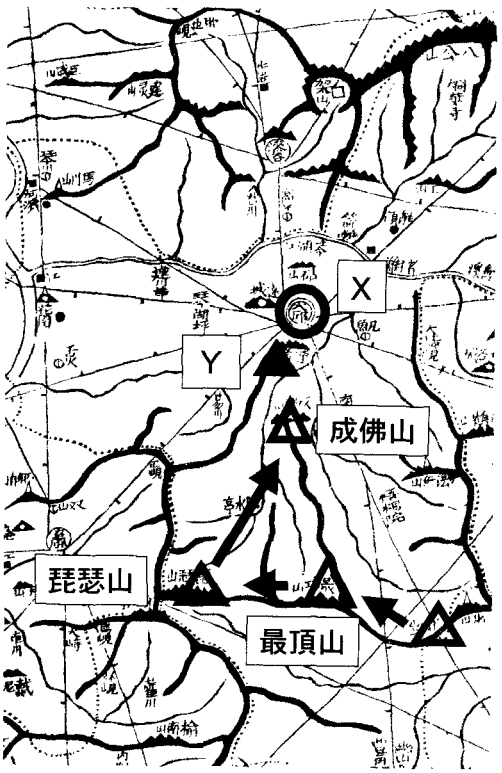


**図5**　大邱府周辺の地勢と「地脈」
（「大東輿地図」を原図とする。X：大邱都城，Y：連亀山）

亀で「脈」を通じさせようとし，その脈は山々を経てつながっているという感覚があったものと考えられる。

このような感覚は，場合によっては現在まで引き継がれることもある。この大邱の石亀については，大邱の地下鉄火災事故の際，サイドストーリーとして，「地下鉄事故と亀岩」（釜山日報　2003.2.22付）という記事が報道された。

それによると，上記の亀岩について「大邱で地下鉄惨事など大事故が続くのは，大邱の「火の気運」を押さえ，地脈を養うコブクパウィ（亀岩）が動かされ，管理もいい加減で，霊験を失ったためであるという話が住民の間で流れている。」とされ，上記の邑志に記載された内容も参照されている。

このような地脈の感覚をよく表しているのが，図5にも使用した「大東輿地図」である。朝鮮時代後期の1861年に作成されたこの地図は，木版刷りで，当時としては大縮尺1：166,000の地図である。この地図の表現上の特徴は，山のつながりと水系によって枠組みを構成しつつ朝鮮半島全体を表現した特殊な表現形態を持っていることである。

図6はその表現方法を示したものであるが，黒く太い線はおおよそ尾根線や分水嶺を示しており，ほぼ上記の「脈」の概念と一致する。いわば朝鮮全土の地脈を表現したものと言ってもよいかもしれない。この地図と，墓の位置を示すために風水師が作成する風水図（図4左）の類似性が指摘されていることからも，脈の考え方が強くあらわれた資料と言えるであろう。

この「大東輿地図」に表現される山の連なりと関連して，朝鮮時代末期に作られたと思われる『山経表』には，現在の中朝国境にあり朝鮮半島において名山とされる白頭山から半島各地の山々への連なりが，図7のように詳細に示されており，いわば白頭山を起源とする朝鮮半島の脈のつながりの体系を表現している[41]。

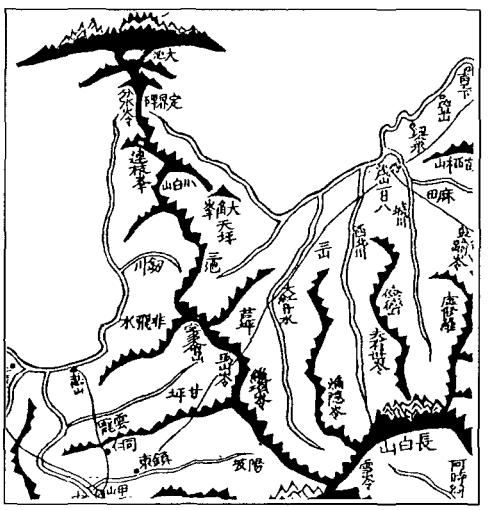

**図6**　大東輿地図の表現方法（白頭山付近）
（「大東輿地全図」，脈（稜線）が黒の太線で示されている）

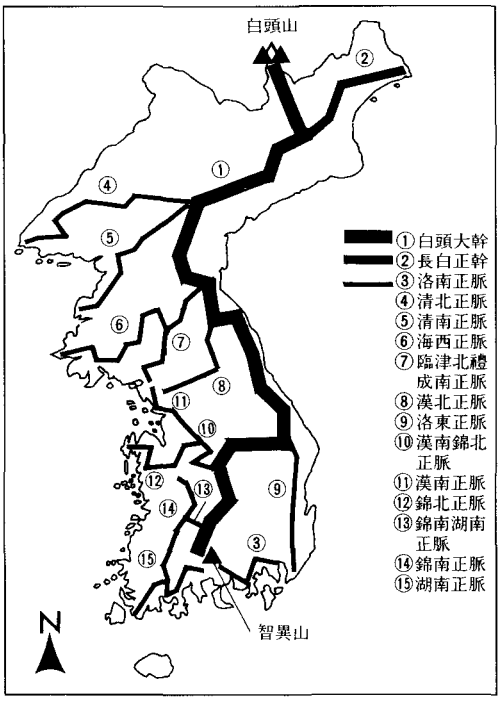


**図7**　山経表に示された山の体系
（「大東輿地図」を原図とする）

(2) 主山（鎮山）・案山など

前章の図1において示した，気がわき出る重要な山とされる主山（鎮山）や，気の漏洩を防ぐ案山・朝山・青龍・白虎などは，朝鮮半島の邑志などの地誌に最もあらわれやすい風水用語である。それは，当時の地誌において行政範囲内の自然環境を示そうとする場合，まず山名が記録されることが多いという理由と，また形法系の風水で見た一種の空間認知を示すような意図があるものと思われる。

1871年の『関東邑志』中「寧越邑誌」山川条には，そのような山々を示す風水用語が記されている。その位置関係は図8に示す通りである。すなわち鉢山（図中ア）は「邑治主山」とされる。寧越の邑治，すなわち行政拠点としての官衙（役所・図中イ）を前章で示した「穴」や「明堂」の位置に置いた場合，主山となるということである。また泰華山は

**図8**　寧越周辺の地勢と山々の位置関係
（「大東輿地図」寧越付近，
ア：鉢山，イ：寧越邑治，ウ：荘陵）

「邑治案山」とされ，蓬莱山は「邑治青龍」とされている[42]。

さらに寧越には王陵である荘陵[43]（図中ウ）があるが，その前方にある会稽山は「案山」とされている[44]。これらの記述は，官衙や王陵が風水上の吉地にあると仮定した上で，その周囲の山々に風水用語を付していることが理解される。また主山は背後に，案山は前方にあるものなので，主山・案山で前後の感覚が表現されているとも考えられる。

同様の記述は，やはり1871年の『忠清道邑誌』中の「洪州邑志」にもあり，図9に示す

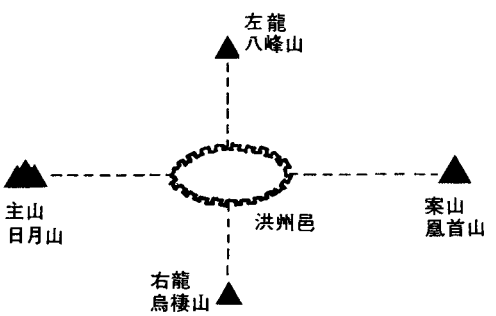


**図9**　忠清道洪州邑の地形認識

ような主山・案山と左龍・右龍が記されている[45]。また，このような邑治の周囲の山々だけでなく，行政単位内にある集落や建築物の主山も記される場合もある。

(3) 水口

水口は，前章の図3に示したように，青龍・白虎などの山々に囲まれた「気のダム」（図1参照）から河川が流れ出る場所を指し，気の漏洩を防ぐことを重視する形法では，重要な場所の一つである。しかし，これまで朝鮮半島の風水に関する研究においてはあまり重視されていない[46]。

1530年に中国の『大明一統志』の影響を受けて編纂されたとされる朝鮮前期の地誌『新増東国輿地勝覧』中の「漢城府」（ソウル）の山川条には，この水口に関する記載がある[47]。

それによると，「假山」という山が漢城の都城の「水口」の内側，訓練院[48]の東北にあり，河の北と南に一つずつあるが，土で山を築き，それで地気を蓄えようとするものであるとされる。これを図10によって確認すると，朝鮮時代の漢城は，山の尾根線の上に築かれた城壁に囲まれた都市であったが，その東部，東大門の南は，都城内を流れる清渓川が流出する「水口」と考えられていた。そして主山である白（北）岳山から出る気を護るために，清渓川の両岸に小山を二つ作り，それで水口を塞ぎ，気を蓄えようとしたということである。

このような水口の概念は次のような場合にも用いられる。朝鮮時代の著名な地理書である李重煥の『択里志』中，「八道総論」で慶尚道の金海について触れた部分では，「両枝又大合於金海　七十州同一水口　作大局」のように，水口と言う語が用いられている。

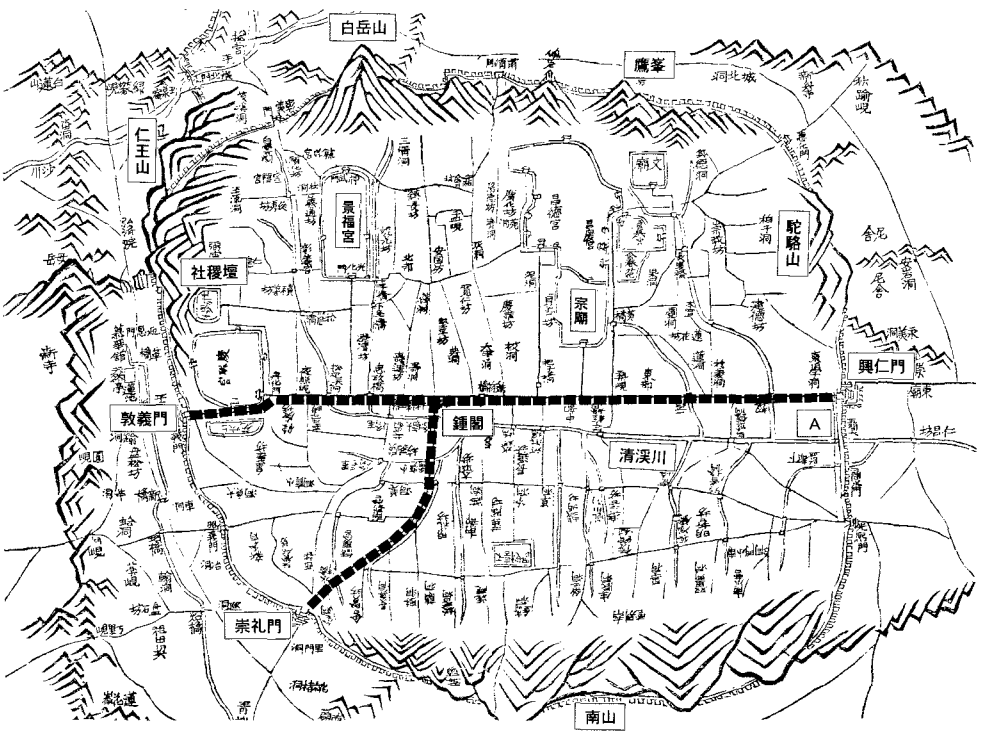


**図10**　「大東輿地図」にみる漢陽（ソウル）城内
（図中Aが「水口」，「大東輿地図」京城帝大版を使用）

これは図11に示すような認識がなされているものと考えられる。すなわち，朝鮮半島南東部の洛東江河口にある金海は，図中東と西の山系（脈）に囲まれた地域の水が海に流入する場所と考えられ，東西の山系（両枝）が金海で合うと表現されている。さらに東西の山系に囲まれた地域（七十州）が同じ水口を持つとの表現がある。水口という概念が，かなりスケールの大きい地域に用いられていると言えるだろう。

これ以外にも水口は，朝鮮時代の農書である『林園経済志』「相宅志」中や，『山林経済』，前掲の『択里志』などでは「論水口」の項が設けられ，説明が加えられている。さらに邑誌にもやはり自然環境の説明で用いられる例が散見される[49]。

本章では朝鮮時代の地誌や地理書を例に，朝鮮半島に強い形法の用語や概念がいかに使用され，どのような特性を持つかについて具体的な例を中心に述べてきた。すなわち，朝鮮半島において，脈，主山・案山，水口の概念などが上記の資料に見られ，自然環境の認識に用いられてきた例を示した。

**図11**　金海の位置（「大東輿地全図」）

具体的には，脈については，山が次々と連なるという感覚や，脈を石像で「つなぐ」発想があり，この脈の感覚は，『山経表』のように朝鮮全土に拡大されることもあった。主山・案山などの本来吉地である「穴」の周囲を指す風水用語は，邑志などで，官衙の周囲の山々を記録し，その位置関係を示す際に用いられた。そして水口も重要な概念として地理書・農書などに把握され，地誌にもあらわれ，場合によってはかなり広い地域の集水圏における河川流出口を示す際にも用いられた。

これらのことから，風水用語や概念が，本来の立地選定のための術語だけでなく，自然把握のための基本的なツールとして用いられるようになったと考えてもよいかもしれない。そしてこのような使われ方は形法に特有のものである。

## V．結語―東アジアの歴史地理学と風水

本稿は，風水のうち朝鮮半島に強い形法の特性と分布について整理し，その上で東アジアの歴史地理学的研究において重要な資料に出る風水用語や概念について検討してきた。

第Ⅱ章，第Ⅲ章では，主に東アジアの風水の中での形法の位置付けを整理検討した。ここでは，「気」を基準とする地形判断の特性が特に朝鮮に強くあらわれている点，そしてこの形法と理法の強弱で，東アジアの中で「風水」の地域性が存在することなどが明示できたものと思う。

また形法と理法の強弱以外にも地域性は存在する。例えば朝鮮半島の風水（形法）によく用いられる「主山」という用語は，形法がある程度見られるはずの台湾や中国にはあま

りあらわれない。また第3章で触れた「形局」などは，何暁昕によれば中国では「喝形」と表現される。そのため，例えば沖縄の風水を研究する際に朝鮮半島で用いられる風水用語や概念を用いるのには問題があるだろう。共通点を含め，その位置づけや用語の違いについては整理・検討されるべきであると考えられる。

第Ⅳ章においては，朝鮮時代の地誌・地理書などに頻出する形法の風水用語について，具体的な例をあげて検討した。これらの例を見ると，当時伝わる風水的環境の保全について示したり，本来の立地選定より自然環境の把握に用いられる傾向もあった。

また特に大邱府の例は，風水用語や概念が，歴史的な側面にとどまらず，場合によっては現在でも顔を出す可能性があることを示しているだろう。

これらの記述を詳細に検討すると，きわめて丹念に山のつながりを示したり，官衙（役所）を風水上の吉地と見立てるような感覚も見受けられた。さらには「水口」の例のように，かなり大きなスケールの地形を示すために用いられることも認められた。

特にこの水口の「拡大解釈」は著名な地理書に掲載されているのであるが，この場合風水を全く知らないと文意自体が分からない可能性もある。また脈のつながりを示す「自〇〇山来」のような記述にしても，脈の概念を知らなければ，何を示しているのか理解は難しいだろう。

風水の研究に地理学者が関与するのは，特に形法系の風水はある種の立地論である点，そして地形を中心とした自然環境を読みとる自然観である点から妥当なことであるだろう。それはなにもかつて風水を「地理」と呼んだためばかりではない。特に東アジアの歴史地理学において重要な資料となる地誌・地理書などにこれだけの形法系の風水用語が出ることから考えて，風水，特に形法はそれ自体，さまざまな研究に必要な一つの基本的な知識と考えてよいのではないだろうか。

（中部大学国際関係学部）

〔注〕

1) 風水を表す語には，これ以外にも「地理」，「地術」，「堪輿」などさまざまなものがある。
2) これ以外に形法には形勢学派，江西学派，巒頭などの呼称が，理法には原理学派，福建学派，理気風水などの呼称がある。本稿では「形法」，「理法」で統一することとする。
3) たとえば，社会人類学者による韓国に関する研究には，以下のような祖先祭祀や墓と風水を関連づけるものが見られる。R.ジャネリ・任敦姫（樋口淳ほか訳）『祖先祭祀と韓国社会』，第一書房，1993。本田洋「墓を媒介とした祖先の〈追慕〉－韓国南西部一農村におけるサンイルの事例から」，民族学研究58-2，1993，142～169頁。
4) デ・ホロート（牧尾良海訳）『中国の風水思想—古代地相術のバラード—』，第一書房，1986，267頁。
5) フリードマン（田村克己，瀬川昌久訳）『中国の宗族と社会』，弘文堂，1995，295頁など。
6) 村山智順『朝鮮の風水』，朝鮮総督府，1931，857頁。
7) 例えば，日本建築学会編『図説集落　その空間と計画』，都市文化社，1989，88～90頁。
8) 韓国の「大韓建築学会誌」には，この時期にすでに以下のような研究が見られる。金鴻植「村の空間構成方法に対する韓国伝統建築思想の研究」（韓文），大韓建築学会誌19-64，1975，45～50頁。張聖浚「風水地理の局面がもつ建築的想像力に関する考察」（韓文），大韓建築学会誌22-85，1978，15～22頁。玄斗鎔「韓国建築の陽宅論に関する考察—朝鮮時代の上流住宅建築を中心に—」（韓文），大韓建築学会誌22-80，1978，44～47頁。
9) 研究グループの当初の地理学者のメンバーとしては，沖縄研究の目崎茂和，町田宗博

が参加した。なお，町田には以下の共著論文があり，沖縄の風水研究の上で重要な文献となっている。町田宗博・都築晶子「「風水の村」序論―『北木山風水記』について―」，琉球大学法文学部紀要　史学・地理学篇36，1993，99～213頁。

10) 渡邊欣雄・三浦國雄編『環中国海の民俗と文化４　風水論集』，凱風社，1994，542頁。

11) 前掲10)，34～36頁。

12) 渡邊欣雄『風水の社会人類学―中国とその周辺比較―』，風響社，2001，29～31頁。

13) 前掲12)，23頁。

14) 都築晶子「蔡温の造林法について－風水と技術」，東洋史苑48・49，1997，31～54頁。

15) 水口拓壽「風水説における「氣」思想の劃期―『劉江東家藏善本葬書』をめぐって―」，東方宗教94，1999，40～59頁。

16) 鈴木一馨「日本における風水の受容」，駒沢大学大学院地理学研究23，1995，47～60頁など。

17) 何曉昕（三浦國雄監訳・宮崎順子訳）『風水探源』，人文書院，1995，292頁。

18) 崔昌祚（三浦國雄監訳・金在浩・渋谷鎮明訳）『韓国の風水思想』，人文書院，1997，402頁。

19) 主要なもののみを以下に記す。崔昌祚（熊谷治訳）『風水地理入門』（原題：地の論理人間の論理），雄山閣，1999，222頁。崔昌祚『良い地とはどこを言うのか―韓国風水の理論と実際』（韓文），ソヘムンジプ，1990，505頁。崔昌祚ほか『風水，その生の地理生命の地理』（韓文），プルンナム，1993，378頁。崔昌祚『韓国の自生風水Ⅰ・Ⅱ』（韓文），民音社，1997，527頁。

20) 李夢日『韓国風水思想史研究』（韓文），日駐社，332頁。崔元碩『嶺南地方の裨補』（韓文），高麗大学校博士学位論文など。

21) 族譜は東アジア各地に見られる家系図であり，祖先祭祀と関連することから，墓に関わる風水用語があらわれたり，墓の位置を示す独特の風水図が添付される場合もある。

22) 堀込憲二「風水思想と都市の構造」，思想798，1990，73～99頁。

23) 崔昌祚は，都邑の風水的解釈を扱う際に，『新増東国輿地勝覧』に掲載された風水用語「鎮山」をより所にして分析を行っている。前掲18)，304～311頁。

24) 瀬川昌久『族譜：華南漢族の宗族・風水・移住』，風響社，1996，274頁。

25) 前掲17)，114～116頁。

26) 三浦國雄「風水説と福地思想」（渡邊・三浦編『環中国海の民俗と文化４　風水論集』，凱風社，1994），51～73頁。

27) この形法と都市や集落の立地に関しては，「風水で○○（都市名）はできた」などと言われることがあるが，筆者は風水のみで都市が立地したという立場にはない。さまざまな立地要因の中の一つとして風水との関わりがあったものと考えている。なお，立地要因の中に自然条件があるのは当然のことであるが，かつて東アジアでは，後述のように，その自然条件の見方が風水（特に形法）であったと考えられる。

28) なお，形法にも山のつながりの方向や，河川が流出する方向で吉凶の判断をする例があり，部分的に形法の中に方位判断が組み込まれているものもある。

29) 前掲22)，81頁。

30) 「其形勢　則自福省之五虎門　蜿蜒渡海東至　大洋中起二山　曰関同曰白畝者是台湾諸山脳龍処也。隠伏波涛穿海渡洋　至台之鶏籠山」。

31) 前掲17)，135～147頁。

32) 都築晶子「近世沖縄における風水の受容とその展開」（窪徳忠編『沖縄の風水』，平河出版社，1990），25頁。

33) 村田あが『江戸時代の家相説』，雄山閣，1999，22～31頁。

34) 中国の風水書の中には，河川や水面に気が流れると考える『水龍経』があり，これを見ると，気の流れを山として表現しない方法もあることが理解される。

35) まだ十分に研究蓄積がないこともあり，速断はできないが，筆者の管見の限りでは，中国，台湾，ベトナムなどでは形法と理法の双方がバランスよく用いられているように思われる。例えば中国の江南地方の集落

に残る古い家屋（四合院）は，尾根の先端に南向きに立地しつつ，入り口を必ず東南部に設けてある。これは形法と理法の双方を用いている可能性が高い。また台湾では形局論とインテリア風水が混在し，ベトナムでは歴史資料に龍脈が表現されるとともに，家屋内で方位判断が行われるようである。

36) 墓の場合は，埋葬した祖先の遺体（遺骨）が生気を浴びることで子孫に良いことが起こるという「親子感応」という考え方がある。

37) 「穴」の位置選定については，前方の山の高さを見て判断する「朝案定穴法」，四方の山の位置関係から判断する「天心十道定穴法」など，さまざまな方法がある。

38) 渋谷鎮明「朝鮮半島における風水地理説を用いた地形認識」，歴史地理学37-3，1995，6頁。前掲26)，63頁。

39) 「連亀山　在府南三里。鎮山。諺傳建邑初作石亀蔵于山脊。南頭北尾以通地脈。故謂之連亀山。自成佛山来。」，韓国学文献研究所編『韓国地理志叢書　邑誌一　慶尚道①』，亜細亜文化社，1982，4頁。

40) 「成佛山　在府南十里。官基案山。自琵瑟山来。」，「琵瑟山　在府南四十里。……自最頂山来。」，「最頂山　在府南二十里。……自八鳥嶺来。」，前掲39)，5頁。

41) 前掲38)，4～5頁。

42) 「鉢山　在府北五里。自平昌斗満山南麓来。為邑治主山」，「泰華山　在府東五里。……為邑治案山。」，「蓬莱山　在府東三里。……為邑治青龍。」，韓国学文献研究所編『韓国地理志叢書　邑誌十九　江原道②』，亜細亜文化社，1986，207頁。

43) 朝鮮王朝第六代の王である端宗の陵。

44) 「会稽山　在府上東面十里。……為荘陵案山。」，前掲42)，207頁。

45) 前掲38)，6～7頁。

46) ただし，中国に関しては何暁昕など，水口に言及する研究がある。

47) 「假山　在都城水口内訓練院東北。一在水南一在水北。築土為山似畜地氣」韓国学文献研究所編『韓国地理志叢書　全国地理志　新増東国輿地勝覧②』，亜細亜文化社，1983，65頁。

48) 朝鮮時代の軍事的施設で，武芸訓練などを担当した官庁。漢陽（ソウル）城内にあった。

49) 例えば1871年編纂の邑志においては，京畿道永平，忠清道蔭城，慶尚道真宝，玄風などで「水口」の記載が見られる。

## Feng Shui Terms and their Concept Seen in Topographical Records and Geography Books in Chosun-period Korea

SHIBUYA Shizuaki (Chubu University)

**Key words:** feng shui, Form School, feng shui terms, regional difference of feng shui, topographical records and geography books, Chosun-period Korea

# 渋谷報告コメント

鈴　木　一　馨

## 1

すでに多く言及されているが，日本における近代的学問としての風水の研究は，村山智順による『朝鮮の風水』（朝鮮総督府，1931）がその嚆矢である。同書は朝鮮総督府による朝鮮の民間信仰の調査報告書の一部であり，このことは総督府が朝鮮の民俗として行なわれていた風水を，朝鮮族の宗教現象のひとつとして捉えていたことを意味している。

もっとも，現在の本格的な風水研究は牧尾良海による「風水思想小考」（『福井博士頌寿記念東洋文化論集』，早稲田大学出版部，1969）に始まるといえる。牧尾は東洋思想研究の中で風水に接触したのであるが，同論考で「その由来は古代思想のあらゆる分野に渉るし，その展開は中国古来の諸宗教や民俗に関連している」と明言し，風水が宗教文化と不可分の関係にあることを指摘している。

とはいうものの，風水がどのように宗教的なのかということについては評者の知る限り，未だ誰も言及していないように思える。ここで評者なりにその位置付けをするのならば，まず宗教とは人知を越えた不可解な現象や存在に対する説明体系であり，またそれに伴う行為の体系である。一方，風水とは土地空間の成り立ちとその意味を説明する体系である。土地空間というのは実体であるが，ただそれは地形学や地球科学のような説明体系を持たない人々にとって自明の構造ではなく不可解な構造である。そこでその説明原理として諸存在の根元である「気」の概念を用いたのである。ただし「気」そのものが現在なおその存在証明を得ていない以上，「気」によって説明される土地空間の構造は未だに人知を越えていることを免れていないと言わざるを得ない。このような点において，説明体系の風水そのものが宗教的だと言える。

以下，このことを踏まえた上で評したい。

## 2

さて，渋谷氏の発表は風水の宗教的性格と実際の土地空間の認識とが，どのように体系化され社会的認知を受けてきたのかということについて，朝鮮半島の事例を挙げて紹介したものである。主要な論点は，1)風水術には方位判断を中心とした原理学派（理法・福建学派）と地形判断を中心とした形勢学派（形法・江西学派）があり，朝鮮半島では形勢学派が強かった，2)朝鮮半島の風水認識は白頭山を起源とした気脈の観念によっており，それに基づき全土の山系をひとつの体系として総括的に理解していた，3)個々の邑は上記の気脈の体系の末端に存在しており，各地誌ではその気脈の体系と関連させながらも個別の空間として風水用語によりその空間の意味を説明している，ということの3点である。

まず，1)の原理学派と形勢学派の問題であるが，これは東アジアに展開し，かつ個々の地域に独自の様相を見せる風水の体系と，それによる空間認識のあり方を理解するためには欠かせない問題である。一口に「風水」と言っても，a)10世紀頃まで行なわれていた，気脈の概念が希薄で，局地的な空間認識に限定される古典的風水，b)9世紀頃に福建地域で創唱された原理学派，c)同じく9世紀頃に江西地域で創唱された形勢学派，のように，時期的・地域系統的に3大別される。

渋谷氏の対象としている朝鮮風水は李朝時

代以来の風水であるが，これは伝説的には禅僧の道詵（827－898）が開祖とされている。形勢学派が創唱された江西地域は8世紀以来中国禅宗の一大拠点となっており，禅宗の伝播に伴う形勢学派の伝播というのは評者が現在研究中の課題でもあるが，少なくとも朝鮮半島において形勢学派が強いということと，禅僧道詵を開祖とする伝説は十分に関連性を持っていると見ることができよう。

ただ，朝鮮半島には禅宗の伝播以前に古典的風水が存在していたことは，渋谷氏の共訳された『韓国の風水思想』（人文書院，1997）にも指摘のあることである。だとすれば，形勢学派が展開した李朝時代に，古典的風水やそれにより意味付けられたものはどのようになったのか（忘却・再解釈など）ということは，空間認識の宗教性のあり方を考える上で提示されるべきであったろう。

## 3

次に 2)の白頭山を起源とした気脈の観念の問題である。この観念はもともと形勢学派で特に強いが，15・6世紀にはその大元を中国西部の崑崙山（実際の崑崙山脈か，架空の山なのかについては現在なお議論されている）とし，そこからの3本の気脈が中国に入っているという考えが成立していた。渋谷氏はすでに，白頭山を気脈の起源とする朝鮮風水の観念は『択里誌』(1714) などに見られることを「朝鮮（李朝）時代末期郡縣図の表現方法にみる風水地理的地形認識」（『歴史地理学』39-3，1997）などで，その白頭山が『大東輿地全図』(1861) では中国の気脈とつながる唯一の地点だと認識されていたことを「朝鮮半島における風水地理説を用いた地形認識」（『歴史地理学』37-3，1995）などで指摘しているが，それを踏まえた上で，朝鮮風水では白頭山に起源する気脈が中国の気脈に対してどのように位置付けられているのかについての言及が欲しかった。

それは，朝鮮風水が風水の全体像の中で朝鮮の地をどのように位置付けていたのかを明らかにすることにつながるからである。それは発表の主題から外れるが，国都の選定に際しても風水を重視した李氏王族が，中国（王朝）に対して朝鮮をどのように位置付けていたのかを明らかにする手かがりのひとつともなるのであり，風水の政治的側面，ひいては朝鮮風水の朝鮮社会に対する役割を明らかにするという意味でも検討に値しよう。

## 4

さて 3)の個々の邑の意味付けの問題であるが，評者は，a)『択里誌』での「金海が七十州（＝朝鮮）の水口に当たっている」という空間把握のスケールが，中国風水で水口を捉えるそれよりもかなり大きなものであるということと，b)『慶尚道邑誌』(1832) と『大東輿地全図』との間で大邱に対する気脈の流路が違っているという2点に注目した。

a)については，中国風水ではミクロレベルの空間認識に用いられる風水用語が，朝鮮風水では朝鮮全土というマクロレベルの空間認識にも対応されていることを意味している。このことから，朝鮮風水におけるミクロレベルとマクロレベルとの関係を導き出すことができれば，朝鮮風水の特徴を際だたせることができるのではないかと考え，ぜひとも渋谷氏が解明されることを期待している。

またb)については，『大東輿地全図』と『慶尚道邑誌』の精度の差が現れたとされていたが，『慶尚道邑誌』にははっきりと地名（山名）と鎮山や案山などという風水用語によって気脈の流路が示されているのであるから，これは単なる精度の差として理解するのには問題があるだろう。むしろ，『慶尚道邑誌』では慶尚道や大邱というミクロレベルの空間認識がはたらいたのに対して，『大東輿地全図』では朝鮮全体というマクロレベルの空間認識がはたらき，その差が現れたと見る

べきではないだろうか。

以上，紙幅の関係で要求だけを出した嫌いもあるが，地名と風水用語の関連から風水による空間認知を検討している研究者は少ないという現状の中で，渋谷氏の研究はその実証的研究としてきわめて貴重であるがゆえである。拙いコメントだが，渋谷報告の持つ意味を理解されたい。

（財団法人東方研究会）

# 渋谷報告についての座長所見

山　元　貴　継

今回，「宗教文化の歴史地理学」というテーマで行われたシンポジウムの中で，この「風水」という内容がテーマに合致していたかどうかについては，やはり判断が分かれたようである。しかし，多くの宗教と同様に，「風水」も東アジアのモンスーン地域の中で良好な環境を求めた原始的な経験則から発展し，思想的な体系化が図られていった。そして，今日でも我々の行動に大きな影響を与えているということについては，否定する意見は少ないであろう。こうした観点から，渋谷氏の報告は今回のシンポジウムとは不可分な内容であったと考えたい。

ただし「風水」には，この経験則的な性格があるゆえに，東アジア各地において汎用性を持つと同時に，その用語や概念が東アジア全体で同様に認識されているかのような誤解が与えられていることが指摘される。とくに日本でも，いわゆる「風水ブーム」に乗り，ここ10年ほどで「脈（龍脈）」や「主山」といった用語が雑誌等の記事にみられることがそう珍しいことではなくなった。しかしながら，これらのブームの中で，「風水」に関する用語の使われ方と，その用語が指す概念についての吟味は，十分であるとはいえない。実際に都市計画の分野などでは，朝鮮半島における「風水」の用語とその概念を日本に適用することの問題点などが議論された[1]ことも ある。

こうした中で行われた今回の渋谷氏の報告の目的は，1)東アジア各地における「風水」用語とその概念を意識しつつ，とくに朝鮮半島（韓国）に限定して伝統的に用いられてきた「風水」用語とその概念についての特徴を示す，2)立地論などと切り離す形で，表現用語として用いられてきた「風水」用語を重視した検討を行う，といったように整理される。朝鮮半島（韓国）における現地調査を経験し，かつ歴史的文献（地誌・地理書）の検討もふまえた研究者によって，「風水」用語とその概念が整理される意義は大きい。

**「風水」の地域性**

実際に東アジア各地をフィールドとする研究者であれば，何かしら「風水」に関わる用語を耳にする機会は少なくないであろう。渋谷氏の報告は，朝鮮半島における歴史的文献の内容に対する吟味に加えて，こうした現地においてえられる経験から見いだされたものである。

そして渋谷氏が指摘するように，韓国に限ってみれば，現地で用いられる「風水」の用語やその概念について，東西南北といった「方位」に明確に結びついたものはさほど多

くない。例えば，実際に多く用いられる「脈」や「主山」は，山々の連なりや山自体といった地形を指す用語である。一方で，一般的には東側，西側を意味すると理解されている「青龍」「白虎」といった用語とその概念も，主たる山から見て相対的にそれぞれ左側，右側に伸びる山々の連なりを指す，といった感覚で用いられており，時にはその東西すら逆転することもある。これが，朝鮮半島の「風水」が「形勢学派」と呼ばれるゆえんである。

以上のように「風水」に関する用語については，東アジアの中でも明確に地域を限定して追究することによって，その地域独自の性格を見いだすことが可能である。報告後の議論においても，日本本土や沖縄における「風水」の強弱という形ではあったが，朝鮮半島との性格の違いが取り上げられたのは，望ましい方向性であったと思われる。そもそも「風水」という漢字語自体が，韓国の「プンス」や沖縄の「フンシー」などの用語を総括して表記できるというのも，問題の根元であるかもしれない。

今後，東アジアのみならず様々な地域を対象とする研究者によって，一見すると「風水」に関わっているようにみえる用語が，実際にはその地域ごとにどのように異なった用いられ方をしており，その用語がいかなる概念を示しているかについての蓄積が進むことを期待したい。そして，それらの情報を交換しあうことで，はじめてその共通性や地域性[2]が見いだされることであろう。

**表現としての「風水」**

最初に述べたように，「風水」には経験則としての性格があるがゆえに，東アジアにおいては，今回渋谷氏も紹介した「脈（龍脈）」や「主山」といった「風水」に関わる用語や概念は，各地の環境において容易に適用できる。さらに，東アジア各地の多くの建物の構造，あるいは都市の立地に関わる環境条件が，「風水」に関わる用語で説明できてしまうことが，混乱を与えている。

実際には，「「風水」用語で施設や都市の環境を説明できる」ことが，必ずしも「それらが明確に「風水」という概念を考慮して設計，あるいは立地した」とはならないはずである。とくに，建物の構造や都市の立地などに少しでも方位など自然環境との関わりが見いだされれば，すわ「風水」を考慮したと断言する風潮に対して，われわれ研究者は冷静な態度で臨む必要があろう。今回のシンポジウムでも最終的には，日本の古代都市の立地を「風水」を用いて説明できるかという議論に向かいつつあった感があるが，近年の「風水ブーム」を背景としている以上，致し方なかったであろう。

しかし一方で，「風水」の都市・集落立地への関与はともかく，報告者の研究対象地域の中核を占めている韓国では，とくに農村地域において，「風水」に関わる用語がきわめて一般的に用いられている。それだけでなく，現在の都市部においてすら，「風水」用語を用いた環境条件の説明がしばしば見られる。例えば「脈」は，単なる山々の連なりではない。また「水口」などは，単なる集落からの出口以上の意味合いを含んでおり，それ以外の用語を用いては簡単には説明できない環境条件である。

こうした，東アジアの各地域において環境条件を表現するために用いられている「風水」用語についての蓄積は，今後求められる方向性であると思われる。先述した「風水」の地域性とあわせ，その地域独自の「風水」用語を理解することによって，はじめて見える景観や，解釈できる地誌・地理書の内容も多い。研究分野の性格上，多くの地誌・歴史書を対象あるいは基礎資料とする歴史地理学においては，自らが研究対象としている地域独自で用いられている用語や，その概念をふ

まえておく必要があろう。今回の報告は，こうした課題を喚起するものであったと期待したい。　（中部大学人文学部）

〔注〕

1) かつて『都市計画』誌上で，江戸時代の日本における温泉地の立地や空間構造の創出に「風水」が関与したとする論考に対して，質疑が示されたことがある。①安藤正順・渡邊貴介・村田尚生「江戸期の温泉地の空間構造に関する研究」，都市計画45-5，1996，66～73頁。②五島　寧「「江戸期の温泉地の空間構造に関する研究」に対する質疑」，都市計画46-3，1997，75～76頁。

2) 中俣はすでに1993年当時に，「風水」の持つ地域的バリエーションについての研究を求める意見を示している。中俣　均「風水ブームとその行く末」，地理38-11，1993，46～51頁。